

< 随想 >

「岡田訳 * 青春の詩と私」
さいたま市 八巻克美(C24)

はじめに：『青春とは』新井 満著(2006・5月第3版)のこと

- 1

平成2年/1990年「青春の詩碑」が建立された。“How to Stay Young”というタイトルの「詩」は「リーダーズダイジェスト誌」で、マッカーサー元帥との経緯云々の注記もあって紹介されたもの。岡田さんはこれに「青春」とタイトルした。“Youth is not a ~”で始まりはするが同氏の訳出の妙、その感性には敬服の一語に尽きる『青春とは』の中で新井さんはそう言う。

- 2

新井氏は“有名詩はたまに改変作されたりする例はある”けれども“戦後日本の復興に携わった多くの日本人の精神的支柱にもなったのが「青春という詩」である”岡田氏の名訳無かりせば、日本に定着しなかったろう”とまで賛辞を惜しまない。

- 3

しかも、同書の中程の記述には、私も少々驚いた。彼の著書「千の風になって」のサイン会の折りのこと、行列に加わっていた初老の男性が“新井さんは「青春」という詩をご存じですか” “この詩に曲を付けて貰えませんか”と依頼された場面、男性が持っていたのは岡田訳「青春」であった、というくだり。岡田訳から優に60年の歳月が流れた平成17年/2005年のこと、船田と名乗られた社長さんのこと。

“今にして尚「青春」を追う人がいる”私は感動し、この小編を書く動機になった。

- 1

私が、岡田訳「青春」という詩の片鱗に触れたのは昭和38年の春、ほぼ40年前のことになる。“今にして思えば、あれがS・ウルマン氏の「YOUTH・青春」だった”との回想に繋がるのである。手元にある、その詩は平易な数行に過ぎないが、明らかに岡田訳に発している。教えてくれたのは当時の勤務先の社長さんであった。しかも、昭和38年のことだったから、それ以前、多分、昭和20年の後半、社長さんは岡田さんにお会いしていたと思う。繊維加工の会社だから「日本フェルト工業統制組合」専務理事の岡田さんと蔵前(くらまえ)辺りで一度ならず、言葉を交わされたと推察するに難くはない。

- 2

同じ時期、その社長さんに届いた「英国からの手紙」のお話を興味深く聴いた。～『先日、私はサンフォライズ社から手紙を受け取りました。それには、サンフォライズ加工の発明者サンフォード・L・クリーエット翁は、昨年八十七回目の誕生日を迎えたが、尚かくしゃくとしてお元気の由です。もし年齢よりも、心の新鮮さと活力が、若さを測る物指しであるならば、彼は実際の若人である、と書いてありました。彼の心の若さこそ、この加工を発明し、世界に広げた基因だと思います。最後に、私が最近感銘を受けた“同意の詩”の一節を掲げます』

(詩の一節として、)

われわれは生きている年数によって
老いるのではない
理想を捨てることによって
老いるのだ
年月は肌にしわをきざむ
然し情熱を失うと
心にしわがきざまれる

“クリーエット翁の活力に相応い”と仰った。「心の若さを失うな」と題して、秋の社内報に寄稿された。その一部が上記。当時、岡田さんのことはお話には無かつた。

- 3

「岡田訳・青春」はじわじわと広がり、昭和 60 年には「青春の会」が発足する。会長さんは宮澤さんとう方で「青春の詩碑」建立の後(平成 4 年 10 月)アラバマの「ウルマン記念館」のアームプレスター女史が来日“「青春」信奉者 互いにエールの交換”と新聞に写真記事が載った。<切り取ってある>
宮澤さんは岡田訳「青春」全文と出会ったのは昭和 40 年の頃と、記事中で語っていた。

- 4

昭和 58 年に東洋紡(株)会長の宇野氏が“「青春なる詩」がある”と日経紙で紹介。私はそれを切り抜いて保存した。作山宗久氏との共著「青春という名の詩」を出版。副題は“幻の詩人”バーミンガムを訪問し、オリジナル版「原詩」を入手した経緯、「邦訳」も発表された。私は昭和 63 年に読んだが社員教育に使いながら“おやっ?”と首を傾げる部分があった。「岡田訳」を全文掲載しているのだが「松永安左工門・訳との説あり」と注釈していたのだ。「岡田訳・青春」は当時“その格調の高さ、日本人の感性に響き合う韻文の力”が圧倒的であった、他方“訳詩は誰?”と神秘的でもあったと推察できる。

- 5

宮澤さん(株トッパムーア)は40年に「青春」と“出会った”と語り、宇野さんの“出版”は58年から60年に掛けてなされた。「青春の会」は60年に“発足”「青春の詩碑」は平成2年に“建った”昭和から平成に移った。昭和天皇ご崩御の正月、風も冷たい皇居前で、私は悲しみの記帳をした。以来15年“昭和の青春”を深々と思い返している。

- 6

ところで、新井さんはその著書で「青春・オリジナル版」の“アンテナなる語彙に執着”宇野さんは“頭を高く”と訳し、「ダークダックス」の「青春」の歌詞は「なかにし礼」氏の作詩だが、やはり“～こうべを高く上げ～、”とアンテナを思わせて、明快である。

- 7

新井さんはまた、「青春」の原詩“オリジナル”に対し、岡田原詩を“マッカーサー版”という言い方をするのだが、大きな違いは“マッカーサー版には「アンテナ」なる言葉が無い”という点である。

岡田さんがオリジナル版に出会っていたら、とも書きながら、オリジナル版であろうと、マッカーサー版であろうと“「岡田訳」は見事！芸術の品格、これを超えるものは無い”と60年も経た今日、新井さんという電通マンOBは『青春とは』で“喝破”してくれた。

- 8

「青春」は前橋「文化館」にも常時展示されている筈。萩原朔太郎と一緒にある。

- 9

なかにし礼、森田公一「青春」を“会場に流す”「ユース卓球場」もあるという。

- 10

飯坂温泉の旅館の女将・康子さんも「青春」の信奉者だ。「青年賦」と題して自筆し、装丁してフロントに飾ってある。頼んだら喜んでコピーしてくれた。

青年賦

青年とは歳の若さを指すのではない

精神の発刺さを用いるのである

青年とは 豊かな頬 赤い唇 柔らかい肢体を言うのでは無く

意志の力 創造力 感激性を指すのである

歳を重ねるだけで誰もが老いてゆくのではない

理想を失い自信をなくした時にのみ人は老いる

年齢は皮膚に皺をよせるが
情熱を失うと その人の魂に皺がよる
常に明るい希望を持ち 勇気凛々 未来の夢に挑戦する人生
命の歡喜を神佛に感謝する人であれば
五十歳であろうと 七十歳であろうとその人は青年である
春 たけなわの 新鮮さこそ 青年の魂のほんとうの姿である
康子書く 福島市飯坂町、旅館『晴山』1995年 / 平成7年4月26日(八巻)

- 11

「青年賦」を康子さんは“ どのような経緯で、自筆して掲額するまでになったのか ”
” 何処から伝わったのか ” と辿るのも楽しいが、時を経て「青春」が「青年賦」となる
“ 心の軌跡 ” を辿るのもまた格別。“ 良いだろう ” と悦こ浸っている誰かがいる。

- 12

自身が“ 感動できればどんな詩形でも、それが一番！ ” と宇野氏もそう書いている。
新井氏は“ 感動あれば、歌になる！ ” と。オリジナル版に回帰しつつ「岡田訳」を読む。

- 13

ウルマン氏は“ YOUTH ” を『自伝・詩集』の冒頭に置いた。「遺言」のつもりだ。

- 14

英国サンフォライズ社を興したクリーエット翁は大西洋を越えて『詩集』を知っていた
から太平洋を渡り日本への手紙になった。昭和30年代「青春という詩」は時空を超えてい
た。

- 15

ここまで書くと当然に、なかにし礼氏作詞、森田公一氏作曲、ダークダックスが歌った
“ その歌詞 ” を記録しておかなければならない。昭和63年に発表の因縁ものだ。「青春の
会」の発案と思うが「C24 * 青春記念誌」発刊の暮れ、偶然に知った。<NHK>

- 16

なかにし礼氏は「直木賞」作家である。「YOUTH・なかにし自由訳」が「森田氏の作曲」
に繋がった。その歌詞を「岡田訳」「宇野訳」と重ねて「ダーク・カルテット」を聴く。
「フリードリッヒ・v・シラーの“ 詩 ” とベートーヴェンの“ 歡喜の歌 ”」を連想する。

- 17

～～ここで再び「母校史」を繙いてみる。

岡田さんは森校長とご一緒だった、そういう時期が昭和 20 年後半にあった。

満開の桜、亭亭と突っ立つポプラの校庭、貴婦人の如き本館、どれも『不朽の名作ドラマ』の二幕目の舞台。昭和 24 年までの 3 年間、私の青春も其処にあったのだが「青春という名の詩」はまだ“お二人の中だけ”の静かな存在だった。

今「青春の詩碑」と対面すると“不思議な巡り合わせ”を思う。「詩碑」面には優美本館の尖塔が映り、花が咲く。啄木に倣えば「、言ふことなし、ありがたきかな、」である。

- 18

～～私の場合で言うなら、母校を出て 60 年の歳月があったから、母校“縁・ゆかり”の事実に沢山出合った。日進月歩する、また変転もする世界の中で、「青春の詩」ほどに“不朽で揺るがない” “時間も空間も超え得る” そういう“名品”はなかなか見つかるものではない。岡田義夫氏訳「青春」の“凄さに震えて”『青春の詩と私』を書きました。

(おわり)

- 1

～～「50 周年＊青春記念誌」は平成 11 年に“一つの区切り”があった。2000 年からの 7 年間は“何となく小さな同級会などを楽しんでいたら、何となく『一年一話』の顔を出す” 「記念誌」は今度こそ全くに“閉じるべく”「追加版」に投じたのが前記の小編であった。推敲を重ねていたら、また感動と嬉しい記事を発見した<読売新聞 07.3.10>

- 2

安藤忠雄氏(建築家)がフランス政府からレジオン・ドヌール勲章シュバリエを贈られた。叙勲式での挨拶で、サントリー社長・佐治敬三氏に激励されたことを回想して披露された。

～ “青春を生きなさい、青春は暦の上の年齢ではない。心のありようだ” ～～
同氏が独学奮闘の 30 代の頃の話。以来、佐治さんのこの言葉が安藤さんの心に深く刻まれ、大きな支えになり、またそうしてきた、、、云々

橋本五郎氏(特別編集委員)秋田の人「五郎・コラム」で「青春」信奉者を紹介された。

(終わります)